

---

# 男は理に修める体もつ物

迷鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

男は理に修める体もつ物

### 【Nコード】

N0345R

### 【作者名】

迷鳥

### 【あらすじ】

その男は、あらゆる物体を修理する力を持っていた。それは常任離れた力で、ゆえにそれは、人として壊れている者の物で。

## 始まり（前書き）

迷鳥として、初の連載作品。  
今回はプロローグ、お楽しみください。

## 始まり

「あっ！」

前から来た自転車を慌てて避けようとした結果、手に持っていた買  
い物袋を落としてしまった。

ガチャン

今、何か嫌な音がしたような……

「あ、すみません」と謝る自転車の運転手の方を見ずに私は袋の中  
を見る。

音の原因となりそうな物を取り出し、その包装を外す。

「あ……」

そして案の定、音原はそれだった。

前のが壊れてしまったので新しく買ってきたマグカップ。その取っ  
手がぱつきりと割れ、器部分にもひびが入っている。

せっかく買ってきたのに、壊れてしまったのと同じようになってし  
まった……

「ど、どうしよう……」

接着剤でくっつくかな……？ 取っ手はそれで良いかもしれないけ  
ど、ひびの方は難しいかも……

その時、

「……それ、貸してみな」

「え？」

いつの間にか自転車は居なくなり、変わって見知らぬ人が立ってい

た。

黒髪のショートカット、服もズボンも黒で、真っ黒な男の人。でも、靴だけは白かった。

一カ所だけ白い男の人は、私の方に手を伸ばしている。

「こ、これ、ですか？」

その先には割れたマグカップ。

「早く」

奪われるように取られた。

「あ……」

「ふむ……」

ひびや取っ手が取れた部分をまじまじと見る男の人。

「この取れたとこ」

そう言っつて手を伸ばした。

「え？ は、はい」

その手に取れた取っ手を置いた。

「……他に破片は無し、罅ひびも深く無い。なら平気か」

「あ、あの……」

「雀、接着剤」

男の人は自分の後ろに手を伸ばした。でもそこには誰もいない。

「……あ、そうだった」

そして何か思い出したように手を戻し、マグカップに触れた。

「まあいいか、コレぐらいならなんとか……」

取れた取っ手を元あった場所につける。

瞬間、割れた部分から光が漏れた。

「!?!」

光は徐々に消え、完全に消えた時、

「よし」

男の人は取っ手から手を離した。

「あ!」

あのままでは取っ手が落ち

なかった。

「あ、あれ……?」

「後は罅<sup>ひび</sup>か」

男の人がマグカップのひびに指を這わすと、その後から先ほど同じ光が漏れて、そして消えた。

男の人はマグカップをくるくると回して見ると、

「完璧……ほら」

私にマグカップを向けた。

「え? え?」

よく分からないまま受け取る。

「それじゃ、次は気をつけなよ」

そのまま男の人は行ってしまった。

何だったんだろう……

「……あれ?」

渡されたマグカップを見ると、

「直ってる……」

ひびが無くなり、取っ手の割れ目なく、ぴったりとくっついていて。接着剤等でくっ付けたようではなく、まるで元から割れていなかった新品のようだ。

「……今の人か?」

名前も告げずにマグカップを直して去っていった。靴だけ白い、黒ずくめな男の人。

いったい、何者なんだろう……

## 始まり（後書き）

初めまして、あるいはこんにちは、迷鳥と言います。

今回は自分の初連載作をお読みいただき、ありがとうございます。

物はいつか壊れる。けどそれを直す男と、それに出会った少女たちの物語。

よろしければ、これからお付き合いのほどを。

感想、いつでもお待ちしております。

## 出会い、あるいは再開

「　　という事があったの」

「なにそれ？」

昼休み、友達と共に弁当をつつきながら、昨日あった事を話していた。

「ちょっとクツシン。そんなの本当にあるわけ？」

私の友達、森岡秋ちゃんもりおかとむぎに怪訝な顔で見られた。

ちなみにクツシンとは、私のあだ名だ。

嘶羽兔奈はやぶしほ。名字の嘶が口に新だから、口新クツシン。

「本当だよ、コレがそのマグカップ」

私は鞆の中からのマグカップを取り出した。

昨日持って帰って改めて見ても、使ってみても、正常に使えていた。本当に直ってるんだ。

「え、持って来たの？」

「うん。トキちゃん絶対そう言うと思ったから」

「はあ、用意周到というかなんとというか」

「とにかく、コレが本当に一度壊れてたも……」

「はいはい、とりあえずその今は使わないマグカップをしまっ

「むう……」

全然信じてないや。

「それよりさ、今日あたし部活無いの、帰りにどっか寄って行くよ」

「うん。いいよ」

という訳で放課後、私たちは駅前の商店街に来た。

「うわ、風強いね」



「う、うん」

行き交う人々の間を、何処かのチラシや捨てられたビニール袋が風に舞っている。

「さてと、どこ行こっか？」

「え？ トキちゃん決めてないの？」

私はてっきり決めてるものだと思ってついてきたんだけど。

「うん、だって部活が急に休みになったんだもん」

「急に？」

「なんかね、顧問の先生が学校休みで、部長に連絡があつたんだって、今日は部活休みにしようって、その連絡が二時間目の休み時間に来たんだよ」

「へえー」

トキちゃんの部活って、確かバレーボール部だよな？ 顧問の先生、どうしたんだろう？

「それでさ……あれ？」

「？ どうかしたの？」

トキちゃんが急に立ち止まった。

その時、

ガチャン！

「！？」

「おお、やつぱり」

関心するトキちゃんの視線の先には、風に煽られたのか、ファミリーストランの宣伝旗が倒れていた。

「さつきからガタガタ揺れてたし、重しの台座も不安定だった。多分重しの水が入って無かつたんだね」

「……」

地面に落ちた旗を見る。くしゃくしゃになって、書かれている文字

は読めない。それに、下の台座が倒れた衝撃でか穴が開いている。その壊れてた台座を見た時、ふと、昨日の男の人を思い出した。あの人がアレを見たら、いったいどうするだろう……

「クッシン？ どうかしたの？」

「え？ う、ううん。何でもないよ」

「そう、じゃあ行こっか」

「う、うん」

倒れた旗を横に見て通り過ぎていく。

でも、気になった私はもう一度振り返って見る。すると、

「……ここなら来そうね」

その倒れた旗の前に、女の人が立っていた。

長い髪を後ろで束ねている。長ズボンに長袖のシャツと長袖のジャケット、そして、肩から長い紐で妙に膨らんだ鞆をかけていた。

女の人は辺りを見回している。

そして、私と目があった。

「!？」

慌てて前を向く。

「どうしたの？」

「な、何でもないよ」

つ、ついてきませんように……

「さてと、どこ行く？」

「そうだね……」

「ちよつと、その人」

うわぁ……

呼ばれたのを無視出来ず、私たちは振り返った。

そこには先ほどの女の人が立っていた。

「なんですか？」

トキちゃんが聞き返す。

「そのアナタ」

女の人は私を指差した。

「わ、私ですか？」

「アナタ、全身黒ずくめだけど靴だけ白い男、会ったことある？」  
それって、昨日の……

「それってクツシンが話してた人じゃない？」

「クツシン？ まあいいわ、ひよつとして、何かアイツが直した物とか持つてたりする？」

「え、えつと……」

私はマグカップを鞆から取り出した。

「コレね」

女の人はマグカップを取ると、上下左右動かして見た。

「……コレ、あの男はどうやって直した？」

「え、あの……その……」

急に光が出て、気付いたら直っていた。なんて言っても信じてくれないよね？

「ひよつとして、急に光が出て、気付いたら直っていた。とか？」  
当たってる。その通りだ。

「は、はい……」

「そつかあ……はあ……アイツ、なにやってんのよ」

女の人は頭を押さえてため息をついた。あの男の人の知り合いの  
かな？

「あの、さつきから話に出てるその男の人って、もしかして、あ  
そこにいる人じゃないですか？」

「「え？」」

トキちゃん指差した方を見ると、

「ああ！」

倒れた旗の前に、あの男の人がいた。何やらしゃがんで割れた台座  
に触れている。

「アイツ！ やつと現れたわね！ はいコレ！」

女の人はマグカップを私に渡すと、

「ここに居たかああああ！」  
急に走り出した。向かう先にはあの男の人。  
ふう……今の内に遠くへ、  
「なんか面白そうだね。あたし達も行ってみよ」  
「え？ ちよつとトキちゃん!？」  
トキちゃんに手を握られて無理矢理男の人たちの方に連れていかれた。

旗の前で男の人と女の方は口論していた。

「急に居なくなつて、いつたいなにしてたのよ！」

「居なくなつたのはそつちだろ、ボクは動かなかつたよ」

「ウソ言うな！ 戻つて来たら居なくなつてたじゃない！」

「……」

「言い返せないようね？ なら謝りなさい」

「……… そんなことより雀、コレだよ」

男の人は視線を反らすと倒れている旗に向き直つた。

「ちよ、そんなことで片付けるんじゃないわよ！」

「旗に外傷は無し、伸ばせば使えるから……問題は台座の穴だね、

雀、ガムテープ」

「まず謝りなさいよ!!」

けど女の人は言いながらも、肩にかけた鞆からガムテープを取り出して男の人に渡した。

男の人はガムテープを適当な長さに切つて台座の穴に張り付ける。

「この風だと、またすぐに倒れるかも……」

「はいはい、これ使いませんか？」

「と、トキちゃん？」

トキちゃんはいつの間にか男の人の隣にいた。その手には水の入つたペットボトル。

「重しだね」



## 出会い、あるいは再開（後書き）

今回の登場人物たち、かなり名前が難しいです。おそらくルビ無しでは解読不可能なものもあるでしょう。

ただし、皆の名前には、ある共通点があるのです。

まだ2人だけですが、もしも分かった方、ご連絡をください。

それでは、

## 理由あるいは、意味

え、えつと……これはどういう状況なんだろう？

確か、女の人にマグカップを見せた後、男の人が旗を治して、行ってしまおうとした2人に、トキちゃんが待ったをかけて……

『良かったら、あたし達とお茶しませんか！』

……という訳で、私たち4人は喫茶店に来ていました。

隣にトキちゃん、正面には男の人、その隣に女の人という並びで4人掛けの席についている。

「昨日はクツシンがお世話になりました」

トキちゃんがぺこりと頭を下げた。

「あ、ありがとうございます」

私も慌てて下げる。

「別に、壊れたものをほっておけなかったただだよ」

男の人は特に気にした様子もなく、注文したコーヒーを口にした。

「こら能矢、お礼言われてるんだからそんな態度するんじゃないわよ」

女の人が言うけど、男の人は更に視線を反らしてコーヒーを飲み続けている。

それを見て女の人はやれやれといった感じに肩をすくめた。

「ゴメンね、コイツ本当に無愛想で」

「いえいえ、なかなか面白い人じゃないですか」

「面白い……か、能矢をそんな風に言う人、案外多いのよね」

女の方は注文したアイステイヤーを一口飲み、

「一応紹介するわ、コイツは麻間能矢<sup>あさま たかし</sup>。そしてアタシは麻間鈴名<sup>すずな</sup>、

双子なの」

能矢さんと、鈴名さんか……あれ？

「でもさつき、雀って呼ばれてませんでした？」  
「そういえばそうだったような。」

「ああ……それはコイツのせいよ。アタシの名前は鈴に名なんだけ  
ど、コイツは『じゃあ雀だ』って。以来、雀呼ばわりなのよ」  
なるほど……

「で？ アナタ達は？」

「あたしは森岡秋です！」

「は、嘶羽兔奈です」

「通称クツシンです！」

トキちゃん、それは言わなくても……

「なるほど、森岡さんと、クツシンさんね」

え、それで呼ぶの？ しかもさん付けで？

「それで？」

鈴名さんは再度訊いてきた。

「はい？」

意味が分からないトキちゃんは首を傾げた。

「え？ なにか依頼があるんじゃないの？」

依頼？

「いいえ全然、本当にお茶したかっただけです」

「な……」

トキちゃんが正直に言うと、鈴名さんは目を丸くする。

「……それだけ？」

「はい」

「……」

頭を手で押さえて下を向いてしまった。

「あ、あの……依頼、って何ですか？」

おそろおそろ訊いてみる。

「ああ、うん。それはね」

その時、



ガチャン！

「!？」

急な音に振り向くと、

「す、すみません……」

お店の人がカップを落としてしまったようだった。

床にはコーヒが入っていたのか、黒い液体の水溜まりと半分に分れた白いカップが落ちていた。

すると、

「す、すみません！　すぐに片付けますので……」

「動かすな」

いつの間にか能矢がそこへ移動して、欠片を集めようとしていた店員さんを手で止めていた。

「え？　ええ？」

「覆水は盆に返らない……まあ元々知らないけど。雀、接着剤」

「了解」

鈴名さんはバツクの中から接着剤を取り出すと能矢さんへと投げ渡した。

接着剤を受け取ると、能矢さんは欠片を集め始める。

「あ、あの……お客様？」

「カップはいいから何か拭く物持ってきなよ」

「は、はい」

パタパタと店員さんは店の奥へ行ってしまう。

「他はいらない？」

「うん、平気」

鈴名さんの質問に素っ気なく返して能矢さんは欠片を集め続ける。

「さて、依頼についてだったっけ？　て言っても、大体分かったと

思っけど」

鈴名さんは腕を組み、

「アタシ達は壊れた物を直して回ってるのよ、一つの街で200個直したら別の街に行く、そうして色んなところを渡り歩いてるのよ」

「おお〜！」

トキちゃんは目を輝かせているけど、

「に、200個……ですか？」

私はその数に驚いた。

「これでも減ったのよ、最初の方は千とかやってた時もあったし。でもさすがに多すぎてそこには2ヶ月居たのよね」

せ、千個も……

「それから何回か上減を繰り返した結果、今の数に落ち着いたわけ、そして……」

鈴名さんは腕を離すと、能矢さんを、正確には能矢さんが接着剤でくっ付けているカップを指差した。

「アレはここでの、ちょうど100個目よ」

「へえ〜、ちなみにここへ何時来たんですか？」

「えっと……3日かしら」

3日で100個も。そんなに壊れた物があるんだ……

「完璧」

能矢さんは立ち上がると、雑巾を持って来た店員さんに直したカップを渡して私たちの所へ戻ってきた。

「今のがちょうど100個目よ」

鈴名さんが言うと、

「違うよ」

能矢さんは否定した。

「その君」

そして私を指差し、

「この子のマグカップを直したから、さっきの旗が100個目」

「直したって……アンタ、やっぱりあの力使ったのね？」

「雀が居なかったからじゃないか、あの程度なら接着剤で簡単だったのに」

「だからあれはアンタが動いたのが原因だって……」

「あの……」

口喧嘩になりかけた2人をトキちゃんが水をさした。

「何でお二人はそんなことをしてるんですか？」

「簡単な理由だよ」

答えたのは能矢さん。

「壊れたものをほっておけないから、だよ」

「でも、お二人共あたし達と同じくらいの年じゃないですか？」

それは私も思った。つい敬語にさん付けで呼んでいるけど、多分一、二歳くらいしか差はないと思う。

「学校とか、ご両親とかは何も言わないんですか？」

トキちゃんはこういう所に目がよく行く、妙なところに気がつく日本人は言っているけど。

「……あのね」

能矢さんはコーヒーを飲み干すと、私たちを真っ直ぐに見て、

「ボクはね、人間に興味は無いんだ」

冷たい一言だった。

正面を見て言われた私たちは言葉を失った。



能矢さんと鈴名さんが？

「まるで旅鳥のように街を転々と、しかも物を直しながら回ってる  
とか！ こんなに面白らしい人初めて見たよ！」

「は、はあ……」

「よし決めた！」

トキちゃんは手をぱん、と合わせた。

「あたし、あの2人を応援するよ！」

お、応援？

「もちろん、クツシンもね！」

え、えええー……

理由あるいは、意味（後書き）

壊れたものを直して回る二人組、能矢と鈴名。  
彼らが物を直している、もう一つの理由とは……

## 残留、あるいは進歩

「さあさあ！ 壊れた物があつたらこちらへどうぞ〜！」  
「ど、どうぞ〜……」

昼休み、トキちゃんに連れられて来てみたら……えっと、なぜか壊れた物を集めることになりました。  
とは言っても、壊れた物を持ち歩いている人はそんなにいなく、始めてから数分、集まったのは3つ。

ボタンの取れたブレザー（ボタン有り）。穴の空いた靴（片方）。そして、腕の取れたぬいぐるみ（取れた腕は無い）。

「う〜ん、なかなか集まらないね」

「あ、あのさトキちゃん」

「ん？ どしたのクツシン？」

「何でいきなり壊れた物を集めようと思ったの？」

「それはほら、昨日言ったじゃん」

昨日……

『あたし、あの2人を応援するよ！』

「だからね、壊れた物を集めて持って行って……」

「200個にして、別の街に？」

「え？」

私の言葉にトキちゃんは首を傾げた。

「だって、こうして集めたら鈴名さん達が行くのが早くなるんじゃない？」

……

「ああー！」

「えええ！？」

「そうだ！ 集めたら早く行っちゃうんだ！」

え、えええー……

「それが目的だったんじゃないの？」

「いやいや、あたしは能矢さんに人に興味を持ってもらおうと思っ

てるんだよ」

人に興味を持ってもらう？

『ボクはね、人間に興味は無いんだ』

能矢さんの言葉を思い出した。

そういえば、そんなことを言っていたけど……

「だってさ、能矢さんだって人でしょ？ だから人に興味が無いなんてあり得ないだろうし……それに、あたしがそんなの許せないんだよ」

「トキちゃん……」

「……だからさ」

「だから？」

「……コレ、どうしよっか？」

トキちゃんは先ほど集めた壊れた物を指差した。

「集めてからそんな事言わないでよ……」

「だ、だって、コレが渡ったら能矢さんが行っちゃうよ」

「そんなこと言われても……あ  
ひよつとしたら……」

「何か思い付いた？」

「……私たちが直す。っていうのは？」

「おおー！」

放課後、私たちは壊れた物を直す材料を求めて商店街に来ていた。

「そういえばトキちゃん。今日部活は？」

「今日は休みだよ」

「へえー」



第一目的は針と糸。それとぬいぐるみの腕の代わりになる布と綿だ。直す、と言つても。全部縫つてしまっただけしか出来ないけれど、これで能矢さん達の仕事を減らせられ……

「キミ達」

後ろから声をかけられた。振り返つて見ると、

「また会つたわね」

能矢さんと鈴名さんが立っていた。

「こ、こんにちは」

どうしよう、壊れた物を見られたらカウントされちゃう。

「ここ、こんなところで、き、きぐ、奇遇ですね〜」

トキちゃん……動揺し過ぎだよ。

「奇遇つて、まだ200集まつてないからね。今は探してるところよ」

良かった。私たちが持つてるのは分かつてないみたい。

「で、能矢の奴がこつちから反応があつた、つて。それでここに来ただけど……ちよつ、能矢」

「……」

能矢は私の持つ鞆を見ていた。中にはぬいぐるみが入っている。

「あ、あの……」

もしかして、バレてる？ 壊れた物の反応つて、能矢さんは壊れた物がどこにあるのか分かるのかな……

「キミ、鞆のここ、壊れてるよ」

「え？」

指差された場所を見ると、鞆の紐が少しほつれていた。

もう2年使つてるし、気にしなければコレくらい……

「ふむ……コレは……」

能矢さんがほつれを見る為に私に近づいた。

私の顔の真横に能矢さんの顔が……

「あ、ああ、あの……」

か、顔が近いいいい。

「どしたのクツシン？ 顔赤いよ？」

「だ、だって……」

「同じ年の男の子が、こ、こんな近くにいたら……」

「……なるほど。コレは少し難しそうだね」

「見終わった能矢さんが離れ、ほっと一安心。」

「その鞆貸して、直すから」

手を伸ばして私の鞆を渡すように催促される。

「え、い、いえ……コレは、大丈夫ですから……」

もし中身を見られたらカウントが増えてしまう。

「いいから貸す」

「あっ！」

伸ばされた手に鞆を取られてしまった。

「ちよつと能矢！ 強引はやめなさいって何回言ったら……」

「……雀」

鞆を持った能矢さんが静かに鈴名さんを呼んだ。

「なによ？ 能矢が聞かないから何回も言うはめになってるのよ？」

「そんな事じゃなくて、どうやら予想は当たったみたいだよ」

能矢さんが鞆のフアスナーを開き、中から腕の取れたぬいぐるみを取り出した。

「コレは……もしかして、依頼かしら？」

鈴名さんが私を見る。

「え、えつと……」

「それは違いますよ！」

トキちやんが横から叫んだ。

「そ、それはですね！ そういうぬいぐるみなんですよ！ クツシ

ンの趣味なんですよ！」

え、えええ！？

「片腕の無いぬいぐるみが趣味って……人は見た目によらないものね」

鈴名さん信じてる！？

「ち、違いますよ!」

「違うよ」

私と、能矢さんが否定した。

能矢さんはぬいぐるみの腕が取れて綿が出ている所に手を触れていた。

「コレは本当に壊れた物で、本当の持ち主は彼女じゃないよ」

「え? それってどういうことよ?」

「知らないよ。彼女が本当の持ち主に頼まれたとかじゃないの?

とにかくコレと鞆を直すから、雀、針と糸と布と綿」

「はいはい」

鈴名さんは鞆の中から能矢の言った物を取り出して渡した。

「少しかかるから、キミ達は鈴名とおしゃべりでもしてるといいよ」

「こら能矢、自己紹介したんだからキミ達じゃなくて名前で呼びなさい」

「……………」

返事をせず、能矢さんはぬいぐるみに針をさして直し始めた。

「はあ……………ああなったら聞く耳持たないのよね。仕方ないわ、アタシ達は言われたようにおしゃべりでもして待ちましょ」

……………えーと。

髪を左側で適當そうにまとめた。妙に明るく元気、というか騒がしいのが。もりおか……………鴉? 鴉って言うってたよね。

それと……………えーと、特徴があまり見当たらない静かなのが、はやし……………クツシン? だっ たっ け?

あ、鞆に名前書いてある。……………なんだコレ? コレでクツシンって読むのか?

この漢字は……………うん、鳩。鳩でいいや。

名前なんて、どうでもいい。

だって、ボクは人間に興味ないんだから。

## 残留、あるいは進歩（後書き）

人知れず、能矢は彼女たちの名前を覚えていた。普通にはないが、それはいつたい、何を意味するのだろうか？

## 年下あるいは、年上

結局あの後、鞆とぬいぐるみが修理されて戻って来た。

鞆は新品のようにほつれていたところが無くなり、ぬいぐるみは無かった筈の手が同じ柄の布で新しく付けられていた。

その鞆にぬいぐるみを入れて、私は今トキちゃんと一緒に昼御飯を食べていた。

「むうー、良い考えだと思ったんだけどな」

ストローを加えてぶくぶくと紙パックジュースを音立てるトキちゃん。

結局、物を修理した事によりカウンタが増えて、麻間さん達の移動を早めただけだったのだ。

後トキちゃん。それは行儀悪いよ。

「あ、あの……」

「クツシン〜何か良いアイデア無い？」

「そんなこと言われても」

「あ、あのう……」

「あ、それおいしそ、一口も〜らい」

「ちよつとトキちゃん、行儀悪いよ」

「あのう……」

「むぐむぐ、うん。おいしいねそれ」

「もー、トキちゃんったら……」

「あ、あのー！」

「？」

呼ばれた声に振り返った。そこに居たのは、

「あ、きゅ、急に大きな声出してすみません。あ、あの、わたし、昨日ぬいぐるみを渡した者なんですけど、あの、その……」

あわあわと慌てる女の子が立っていた。ぬいぐるみを渡したって、ああ、あの直された腕の無かったぬいぐるみの。

「確か……一年生の」

「はは、はい。木山美都琉きやま みつるといいます」

ぺこんと頭を下げた木山さん。髪をみつあみに結んで眼鏡をかけている。何だか大人しそうな雰囲気だな。

「おお、なんか2人は似てるね」

「え？ 似てる？」

「うん、かな〜りね」

かな〜り……

木山さんを見つめる。別に私は眼鏡をかけてないし、髪も全然違う。……どこが似てるんだろ？

「あ、あのう、話を戻して良いですか？」

「あ、はい、どうぞ」

木山さんは肩にかけていたから鞆からある物を取り出した。

「昨日渡したぬいぐるみの取れた腕を渡し忘れてしまいました」

ぬいぐるみの腕、でも確かアレは……

「コレだよね？」

トキちゃん私の鞆の中から直されたぬいぐるみを取り出して机の上に置いた。取れていた筈の腕も、能矢の手によってちゃんとくっついている。

「え！ で、でも腕はわたしが持ってた……」

「コレぐらい朝飯前さ！」

親指を立てて誇らしげなトキちゃん。直したのは能矢さんなのに。

「まあ昼御飯食べてるけどね！」

ええー……

「は、はあ……」

木山さんもきよんとしている。

「え、えつと……直して下さって、ありがと〜ございます」

ぬいぐるみを受け取ってぺこんと頭を下げた。

「いやいや、直したのあたし達じゃないから」

そう、直したのは私達じゃない。

「で、では、その直した方はどちらに？」

「ん〜……まだこの街にはいると思っけど」

「ぜ、ぜひお礼を言いたいのですが」

「良いとも！」

ビシッ！ と親指を立ててトキちゃんは宣言した。

「そうと決まったら放課後に……あ！」

けど次の瞬間に思い出し、

「しまった〜今日は部活あったんだった」

親指を立てたまま手を動かして、

「という訳でクツシン！ キミに任せた！」

ビシッ！ と私を指さした……って、

「え、ええー!?!」

「す、すみません先輩。わたしの為にわざわざ……」

「大丈夫だよ、特に用事も無かったし」

帰宅部だからトキちゃんみたいな事にもならないしね。

という訳で、木山さんと共に麻間さん達を探して歩いていた。

今は商店街を散策中だ。どこに居るのかという目安は無いので、歩

いて探すしかない。

強いて言えば、何か壊れている物があるところだろうけど……

「お願いします！」

大きな声が聞こえた。何だか聞き覚えのある声のような、

「すみませんが、そればかりは出来ません」

続けて声、それにはもっと聞き覚えがあった。つい先日聞いたばかりだから。

「あっちかも」

私達は声がした方向に向かった。すると予想通りの人と、予想外の人が一緒にいた。



「すみません。他を当たっていただけですか？」

片方は鈴名さん。いつもの肩掛け鞆が何故か無いけどそれ以外は普通だ。何かを断っているようだけど。

「そこをなんとか！ ようやく見つけた最後の希望なんですよ！」  
声を荒げていたのは、なんと……

「よ、四枝先生？」

「え？」

木山さんがその名前を呼んだ。

さらりとした長い黒髪の女の人。四枝先生、私達の通う学校の先生だった。

「木山さん……隣は確か二年生の……」

四枝先生は私を思いだそうとしているけど、きっと難しい。何故なら私は先生から授業を習った事が無いからだ。

先生の担当は音楽、けど私は美術を選択しているから顔を合わせる機会が少ない、先生が全生徒を、生徒が全先生の名前を知っているのもそうは無いだろうから。私が名前を知っていたのは、先生がトキちゃんの所属してるバレーボール部の顧問をしているのを聞いていたからだ。

そして確か一年生の担任もしていた筈だ。木山さんを分かったのは担当しているクラスの生徒だからだろう。

結局、四枝先生は私の名前を思い出せなかった。

「あら、嘶さん」

鈴名さんが私の名字を呼んだ。良かった、本当にクッションと呼ばれると思ってたから。

「こんにちは、鈴名さん」

「あら？ 森岡さんは一緒じゃないのね」

「今日は部活で、あの、能矢さんは？」

回りにも見当たらない。何か直してるのかな？

「向こうで自転車を直してるわ。町にはよく有るのよね放置自転車って、おかげで130を越えたところだけ」

それもカウントされるんだ。

「ところで、隣の子は？ 同じ学生みたいだけど」

「一年生の木山さんです。昨日のぬいぐるみの持ち主で、能矢さんにお礼が言いたいと」

その時、

「終わったよ雀」

能矢さんが肩掛け鞆を掛けて現れた。そうか、修理道具の入った鞆ごと渡していたのか。

能矢さんは私達を見た後に四枝先生を見て顔をしかめた。

「増えたのは良いけど、まだ断れてなかったの？」

「仕方ないじゃない。そこをなんとか、の一点張りなんだから」

「はぁ……あのですね」

能矢さんは鞆を下ろすと四枝先生の前に立ち。

あの時みたいに、冷たい一言を放った。

あなたのものは、なおせないんですよ

年下あるいは、年上（後書き）

今回で主要人物が揃いました。

それと同時に、残り数回でクライマックスを迎える予定です。

新たに現れた二人は、物語に何をもたらすのか……

## 搜索、あるいは発見

あなたのものは直せない。能矢さんは確かにそう言った。

あの能矢に直せないものって……

「そんなことを言わないでください！ 貴方はどんなものでも治せると聞いたのですから」

「あなたは捉え方が違うんだよ。ボクは獣医じゃないんだから、動物の病気は治せないよ」

ああ、そうか。

四枝先生が治してほしいのは、動物の病気。物体を直せる能矢さんも、病気は治せないということか。

「それに……」

次に、能矢さんが言った言葉に……

「正直どうなるろうと、ボクには関係ないんだ。」

「!?!」

「……」

鈴名さんを除いた私たち三人は声を失った。

「分かったなら、さっさと獣医にソレを連れて行った方が……」

その時、

「いたーーーーー!!!」

大声が辺りに響いた。

全員がそちら向くと、そこに居たのは、

「と、トキちゃん?」

トキちゃんがこちらへと走ってきた。

「四枝先生! たいへんで……クッシン?」

私に気付いたトキちゃんは止まった。

「麻間さん見つかった？」

「う、うん。そこに居るけど」

「そっかそっか」

「トキちゃんこそどうしたの？ 確か部活だったんじゃない……」

「あー！ そうだ！ 四枝先生！ たいへんですよ！」

「どうしたの森岡さん？」

「今先生の家から電話があつて、コノ八ちゃんが逃げ出したって！」

「！？」

先生の顔が驚きで固まった。

話の流れ的に、コノ八ちゃんとは先生が飼っている、病気の動物かもしれない。

それが、逃げ出した？

「……猫らしいね」

能矢さんが呟いた。コノ八ちゃんって猫なのか。

「猫は死に際を人にあまり見せだからない動物だ。きっとそれは、死に場所を探しに行ったんだよ」

「能矢！！」

鈴名さんが怒鳴った。先生の目の前でその言葉は苦痛だ。

「事実でしょ？」

「くっ……」

「今は争ってる場合じゃないよ！ 鈴名さんも能矢さんも手伝つて！」

「手伝つてつて、なにを？」

「コノ八ちゃん探しを！」

という訳で、私たちは三組に別れて先生の飼い猫、コノ八ちゃん探しを開始した。

組み合わせは麻間さん達、トキちゃんと四枝先生、そして私と木山

さんだ。

「いったいどこに行っただんでしょう？」

「うーん……」

麻間さん達探しの次は猫のコノハちゃん探し。さっきみたいに声が聞こえてくる訳無いから難易度は上がっている。

特徴は四枝先生に聞いたので分かっている。白と茶のぶちで、名前の由来になった葉っぱ型のぶちが頭の上にあるらしい。

でもぶち猫って結構多い、その中からコノハちゃんを見つけるとなる……

「手当たり次第探すしかないね」

「はい」

坪の上、路地の中、上から下まで目を皿のようにして木山さんと2人して見渡す。そうすると猫はいっぱい見つかるけど、全部コノハちゃんではなかった。

そのまま一時間が過ぎ、私たちは一度集まる事にした。集合場所に行くと、麻間さん達がすでに来ていた。

「どうだった？」

「見つかりませんでした」

「こつちもよ、壊れた物ならすぐ見つかるんだけど」

きつとトキちゃん達も……

「あ、あの」

その時、木山さんが能矢さんに声をかけた。

「何？」

「わ、わたしのぬいぐるみを直して下さったのって能矢さんなんですよよね？ そのお礼が言いたくて。ありがとうございます」

「別に、壊れた物をほおっておけなかったただだよ」

そっけなく能矢さんは応える。

「こら能矢。お礼言われてるのになんて態度なの」

「い、いいんですよ」

「全く、逃げ出したんだからわざわざ探さなくたって良いじゃない

か」

能矢さんは近くにあったベンチに座って愚痴のように呟いた。

「わざわざ見せたく無い姿を隠すために逃げたんだ。飼い主だってそんな姿を見たくはないはずなのに。どうしてここまで探すのか、僕には分からないね」

「……………それは」

ふと、私の頭の中に言葉が留まった。そして無意識の内に、その言葉の口にしていた。

「きつと、ちゃんとお別れがしたいからですよ……………何も言わずにお別れなんて、寂しすぎますから……………」

まるで、能矢さんの言葉に込めるかのような言葉。

「……………」

それを聞いた能矢さんは、

「……………へえ、君は随分変わってるね」

うつすらと、普通に見たら分からないくらい少しだけ笑った。

「ちゃんと別れたい、か。どうせいつかは離ればなれになるのに。

いや、なるから、別れはちゃんとしたいって事かな？」

「え、え？」

「ものはいずれ壊れる。けど僕はそれを否定する。けれど、ものは必ず別れがくる。……………それはさすがに否定出来ないかな……………」

能矢さんは何か思い出したように遠い目をした。

「能矢……………」

鈴名さんも何か言いたげだ。

今の言葉に、何か思い入れがあるのだろうか……………

その時、携帯が鳴った。

発信者はトキちゃんだ。そういえばまだ集合場所に来ていない。

「もしもし？」

『もしもしクッシン！？ 見つけたよ！』

見つけた？

「見つけたって、コノ八ちゃんを？」

『そう！ でも大変なの！ 早く来て！』

「え！？ た、大変ってどういうこと！？」

『いいから早く来て！ 河川敷のところだから！』  
それで通話が切れた。

「……………」

かなり大変そうだった。コレは急がないと！

「森岡さんなんだって？」

「コノハちゃんを発見したけど、大変な状況だって……………」

「なら早く行きましょ。場所は？」

「トキちゃんは河川敷って言ってました。こっちです」

私達はその場を離れ、河川敷へと向かった。



## 終わりあるいは、開始

河川敷、学校のある住宅街と商店街を繋ぐ橋のかかる場所。そこに私たちはたどり着き、トキちゃんと四枝先生を発見して駆け寄った。

「みんな！」

「コノハちゃんが見つかったって……」

「うん！ ほらあそこ！」

トキちゃんが指差した先には、河川敷に唯一植わっている一本の木、その遙か上に一匹の猫がいた。

白と茶色のぶち、頭に葉っぱ型の模様があつて、コノハちゃんの特徴を全て満たしていた。更に首には鈴のついた首輪をしていて、どこかの飼い猫だと分かった。

「見つけたのはいいんだけど、手が届かないんだよ」

コノハちゃんは木の上で動けないでいた。その距離は手では絶対届かず、木を登らないといけないものだった。

「誰か、木登り得意な人いない？」

トキちゃんが訊ねる。四枝先生も私たちに視線を向けた。

でも、私は木登りなんてしたことがなかった。

木山さんも首を横に振る。

「ごめんなさい。アタシも木登りはダメなのよ」

鈴名さんもダメらしい。となると、残ったのは……

「能矢、アンタ木登り出来たでしょ？」

「まあね。でもボクにはそこまでやる気は……」

能矢さんはふと視線を上に向けたと同時に言葉を止めた。その先には木と、コノハちゃんが居る。

「……………なるほどね。か」

何か呟くと、木に近づいて手を掛けた。ひよいひよいと能矢さんは登っていき、あっという間にコノハちゃんの元へたどり着いた。

「能矢さん凄い！」

「すごいです能矢さん！」

トキちゃんと木山さんが驚きの声を出す。

能矢さんはコノハちゃんの首を掴んで、

「……やっぱりね」

コノハちゃんの顔を見ると、

空中へと放り投げた。

『!?!?』

それを下で見ていた私たちは驚いた。

けど、私は思い出した。

「あ、でも猫だから大丈夫なのか！」

トキちゃんも気付いた。

そう、猫は一定の高さからなら落ちてもちゃんと着地出来る。

高さ的には平気、もしもコノハちゃんがただ降りれなかったただだ

としたら、これで問題は解決

ドシヤ

「え……?」

コノハちゃんは着地せず、そのまま地面にぶつかつた。

「コノハ!？」

四枝先生が慌てて駆け寄る。私たちも後に続いた。

地面に倒れ込んだコノハちゃんを四枝先生が抱き上げる。すると、

「っ!？」

四枝先生は悲鳴に近い声を漏らした。

「ど、どうしたんですか？」

木山さんが訊ねた。

でも、私には予想が出来てしまった。

そして、

「……………死んでる」

私の予想は当たってしまった。

『……………』

四枝先生の言葉に私たちは言葉を失った。

トキちゃんは目を丸くして、木山さんは泣きそうな表情、私は口を手で押さえて出そうな声を押さえる。

「やっぱりだつたね」

その時、能矢さんが木から降りてきた。

「木の上でもうその状態だったよ。だから落とした」  
能矢さんは知ってたんだ。  
さっき木に登る前、能矢さんはこう言っていた。

もう手遅れ、か。と。

「木に登るので力を使い果たしたんだろうね。わざわざあんな高い場所を選ばなくてもいいものを…」

「能矢！」

鈴名さんが能矢に詰め寄って服の襟を掴んで言葉を止めた。

「アンタ言ってる良いことと悪いことぐらい区別出来るでしょ!?!  
なんでそんなこと言うのよ!」

「事実だからだよ」

鈴名さんの怒りに対しても能矢さんは冷徹に応える。

「だからといって状況を考えなさいよ! あの人がどれだけ思っていたのか!」

「……」

能矢さんは四枝先生を見た。

膝から崩れ落ち、コノハちゃんを抱いて涙を流している。

「……分からない訳無いだろ。別れの寂しさを」

「っ!?!」

能矢さんの言葉に鈴名さんは、はっとした。

「まさか、能矢、アンタ……」

「そのまさか、だよ」

能矢さんは手を外させると、四枝先生に近づいた。

「貸して」

泣きじゃくる四枝先生に手を伸ばした。言葉から見ると、コノハちゃんを渡せという事だ。

「……………」

しかし四枝先生は聞こえていないのか顔も上げない。

「……………」やれやれ」

能矢さんはため息と共に首を軽く左右に振った。

「助けたいなら。貸して」

言葉を足して再び手を伸ばした。

「……………」え？」

今度は反応した。

四枝先生は少しだけ顔を上げて能矢さんを見る。

「あの時言つたよ。ボクは動物の病気は治せない。でも、それがものなら、直せないものは無い」

「……………」

四枝先生はおそろおそろコノ八ちゃんだったものを能矢さんに渡した。

能矢さんは受け取ると、

「骸というのは、生物から生を抜いた、もの。それがものである以上、ボクに直せないものは無い」

コノ八ちゃんを左手に持つ。

すると、空いている右手が光を帯びた。

「！？」

トキちゃん、木山さん、四枝先生はその状態に目を丸くした。

けど、鈴名さんと、私はそれを見たのが初めてではなかった。

能矢さんに初めて会った時、マグカップを直した時に能矢さんは同じように光を手にとっていた。

あの光で触れたマグカップは取っ手がくっつき、ヒビが消えた。

アレと同じ事が、もしもコノ八ちゃんに起こるとしたら……

撫でるようにコノ八ちゃんに右手を数回当てると、光が消えた。

「……………」よし、完璧」

すると、

みゃあ

コノハちゃんが鳴いた。頭を上げた。それは生きている証拠だった。  
「コノハ！」

名前を呼ぶ四枝先生に能矢さんはコノハちゃんを渡す。

「コノハ！……本当に……良かった……」  
さつき以上に涙を流しながらコノハちゃんを抱き締めた。

「ボクは動物の病気なんて治せない。だからそれは直したただけだよ、猫という生物の元の形にね。病気は無くなってると思うよ」

「ありがとうございます！ コノハを治して下さい！」

「別に、ボクはただ直したただけだから……それに」

能矢さんはふと、私たちの方を一瞬だけ見た。分かりにくかったけど、確かにこちらを見た。

「別れはちゃんとした方がいいからね。次の別れには、ちゃんとするんだよ」

「はい……ありがとうございます……」

四枝先生はそれ以上の言葉を言わず、コノハちゃんを抱き締めながらその場で泣き続けた。

その横を抜けて、能矢さんが私たちの方へ、

「なかなかやるじゃない。あれだけ断つてたのに」

「ボクは医者じゃない。病気は範囲外だからだよ」

「じゃあ、病気で死んだ後に来たら直してたのかしら？」

「……………さあね」

間があつて曖昧な答えだけど、きっと能矢さんは同じ状況だったら直していたと思う。

それだけ、能矢さんにとって別れは重要なんだろう。

「そうだ、雀」

「なによ？」

「数を上げるよ」

数を上げる？

能矢さんの言葉に鈴名さん以外が首を傾げた。

「幾つにするの？」

「一万」

「一万個。それで良いのね？」

「うん」

もしかして……

「その数つて、もしかしてノルマの数ですか？」

トキちゃんが気付いて訊ねる。

「うん、だから後数千以上かな」

「えええ！？」

私とトキちゃんは目を丸くして驚いた。ノルマの事を知らない木山さんだけが首を傾げている。

「という訳だから。もしも何か見つけたら持って来てね」

そう言い残して能矢さんは河川敷を歩いていってしまふ。少し行って振り返り、

「雀、行くよ」

「先行つてて、すぐに追い付くわ」

「……」

前を向いて行つてしまった。

鈴名さんが私たちを見る。

「まだ暫く、お世話になりそうね」

「そ、そうですね」

「けど本気なんですか？ 一万個なんて」

「アイツは言った以上やり切るまで町を離れないわ。昔にも、似たようなことをした事があるんだけど、きっと今回も同じ理由なの」

「同じ理由、ですか？」

「ええ、アイツが興味ある人が居るか居ないか。それが判断基準な

のよ」

能矢さんが興味ある人……それってまさか……

「それで、3人にお願いがあるんだけど」

「何ですか？」

「能矢と、沢山関わってほしいの」

「能矢さんと？」

「ええ、アイツは無愛想だし、言葉をオブラートに包まないし、人に興味が無いって言うけど……今のアイツはアナタ達に少なからず興味があるのよ。だからノルマを、街の滞在を長引かせたの」

「か、関わってどうするんですか？」

「……見たと思うけど、アイツには触れただけでものを直す力があるの。……でも、そのせいで心に鍵をかけてしまったのよ」  
直す力のせいで、心に鍵をかけてしまった……

「……だから、アイツの心の鍵を開ける。能矢を、普通の人のように直したいのよ」

能矢さんを、普通の人のように直したい……

「物を直すアイツだけど、一番直さなきゃいけないのは、能矢なのよ……お願い出来るかしら？」

「……」

少しの沈黙、そして、

「あたしに出来ることならなんでもやりますよ！」

トキちゃん胸を叩いて言った。

「わ、わたしも、お力になれるのなら」

木山さんはこくこくと頷いた。

「嘶さんは？」

「は、はい。私で良ければ」

私も頷いた。

「ありがとう……ちなみにこの事はアイツには内緒ね。気付いて無



いだろっけど、アイツも多分自分なりに何か考えているかもしれな  
いけど、あまり期待してないからね……それじゃ、よろしくね」

鈴名さんは能矢さんを追って河川敷を走った。

能矢さんは橋の上ですぐに見つかり、2人は並んで行ってしまった。

「よし、そうと決まったらやるよ！ クツシン！ みーちゃん！」

「み、みーちゃんとは、わたしのことですか？」

「うん、名前が美都琉だから、みーちゃん。だめ？」

「い、いえ、嬉しいです」

「よし、じゃあやるよ2人とも！」

「やるよって、何を？」

「それはもちろん！ 壊れた物集めだよ！ それを能矢さんのところへ持っていてお喋りしまくる、そしていずれは能矢さんもお喋りに！」

「お喋りな能矢さん……」

「そ、想像出来ません」

「……でも、それはそれで確かな一歩だよ。頑張ろう、皆」

「はいです」

「おう！ という訳で、まずはクツシンの家から搜索開始だ！」

「え……えええー！？」

物を直す男の人が居た。

男は理を修める体をもった物だった。

だから、男が一番直すべき物は、

理を修める体をもった物

物体修理男だったのだ。

## 終わりあるいは、開始（後書き）

長いようで短かった。始まりが2月の19日でしたので、約3か月の物語でした。

いずれ来る別れを否定した結果、彼は今のような物になってしまった。それを直す為に旅した先で出会った彼女たちと、彼は直すことが出来るのだろうか。

『男は理に修める体もつ物』 自分にしてはかなり異質な作品となりました。

他作品との繋がりが無く、無愛想な少年がヒロイン（ヒーロー？）だったり、名前にルビが無いと読めなかったり。加えて、迷鳥の名で書いた初連載作となりました。

これからも、機会があればまた迷鳥の名で書きたいものです。

物語はこれで終わりですが、後一回、お付き合いください。

それでは、

理に修める体をもった物の断は秋の木のうちから（前書き）

これは、ある物語の始まる前

理に修める体をもった物の断は秋の木のうえから

アレは何時の事だったか

具体的な日付や時間は覚えていない。確か秋だったかもしれない

でも、三つだけ今でも忘れられない事があった

一つは、ボクは何故か高い木の上に登っていた事

一つは、木が植わっている下には道路が走っていた事

もう一つは、その道路で、僕が木の上から見下ろしていたその前で

人が車に引かれて死んだ事

それを見たボクは急いで木から降りて駆け寄った。でもたどり着く頃にはもう彼女は冷たくなっていた

ボクは泣いたかもしれない。覚えていないから断定は出来ない

ただ、こつは考えたと思う

せめて、ちゃんと別れかった、と

壊された彼女は、もう戻って来ないのか、と

そうしたら、妙な声を聞いた気がする

その言葉は全く覚えていない。ただ、ボクなりに一言でまとめてみた事があった

それが生の物でなければ、直せるようにしてあげる

妙に明るい声だった気がする

声が聞こえなくなった後、ボクは彼女だった物に手を置いた

すると、手から出た光が彼女の傷口を塞ぎ、みるみる内に元あった姿へと直していった

光が消えると同時に、彼女は目を覚ました。まるで車になど引かれていなかったように完璧に、直っていた

それを見た車の運転手が、悲鳴を上げて逃げ出した気がした

化け物、言われていたかもしれない。ただ断定は出来ない、三つ以外はよく覚えていないから

それから彼女にボクは今あった出来事を説明したと思う

彼女は多分驚いていた。それと同時に、何故か怒られた気がした

そんな物を手に入れてどうするのよ。そんな感じだったと思う

それにボクは答えた筈だ。別に良いじゃないか、とやかく言う親もいないんだし

ボク達には両親がいなかった

捨てられた、らしい。定かではないが、気付いたら両親という物はなかった

2人だけで生きていたから、これからもそれが続くと思っていた中であの出来事

だからボクは願った

それが叶った

彼女を直す事が出来た

ちゃんとした別れをする事が出来るようになった

別にただ、それだけで良かった筈だけど。気付いたらボク達はその町を離れていた

彼女曰く、アンタを直せる人を探すのだとか

ボクを直せる人

物ならば直せるボクを直せる人

必ず来る別れを拒み否定したボクを直せる人

考えてみたら、一番壊れていたのはボクだったのかもしれない

だから、ボクは彼女と共に行く

物体修理男を、

ボクを、直せる人と出会う為に



理に修める体をもった物の喩は秋の木のうえから（後書き）

始まりはある人との別れだった

ちゃんと別れられれば、今のようにはならなかった。けど、それが彼の選んだ道である以上、そうして物語は始まるのだった。

名前の表記はありませんが、本作を全て読んでくださった方なら誰だかわかるはずです。

もしもここから読んだ方がいらっしやいましたら、ぜひ本作をこ拝読ください。

そしてここまでお付き合いいただきありがとうございますとついでに感想、評価及び何か一言、お待ちしています。

それでは、

今回は、迷鳥として。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0345r/>

---

男は理に修める体もつ物

2011年6月10日22時10分発行